

コミュニケーション障がいによる問題への取り組み ～PECSプログラムを支援に取り入れて～

陽の出園 支援員 山本 秀俊

1. はじめに

当施設では入所者の生活介護を行う中で、軽度障がい者、高齢者、重度障がい者で活動班を分かれ、それぞれの利用者さんに対し支援を行っている。当時は生産班（軽度）、高齢班（高齢）、療育班（重度）として活動班を分けていたが、今年度よりのぞみ班（軽度）、ひかり班（高齢）、こだま班（重度）と班に所属する利用者さんも変わり、新たに支援を開始している。今回対象となる利用者さんは重度障がい者に該当しており、当時は療育班に所属し引き続きこだま班に所属する方で、以前に地域を巻き込む問題に発展する程の特異行動を持った方が対象となる。適切なコミュニケーションを取る事が出来ない障がいから起こる問題、当時の職員もどうしていいのか分からず頭を抱えていたが、本人に合った支援方法が見つかり特異行動が徐々に薄れていった事例を今回は紹介したい。

2. プロフィール

[氏名]	Rさん
[生年月日]	昭和29年2月7日
[性別]	男性
[療育手帳]	A
[障害者程度区分]	5
[障害及び疾病]	重度知的障害・自閉的傾向
[家族構成]	両親（他界）、兄（保護者）、姉（県外在中）
[性格]	温厚、大人しい
[好きな飲み物]	お茶、缶コーヒー
[発語（発声）]	「アー」、「ウー」、「ちゃ」、「まめまめまめ・・・」など
[身体表現]	身振り手振り（指差し）、ジェスチャー、直接物に手を伸ばす、など
[日常生活における基本行動]	部屋で寝ている、椅子に座りTVを見ている、棟内を歩き回る、など

3. Rさんの特異行動

(1) 無断外出

「無断外出」について、本人が好物である缶コーヒー飲みたさに近所の商店まで行き、中に入って売り物の缶コーヒーを勝手に飲んでしまうという事例がある。頻度として1週間に平均3～4回は見られ、多い時には毎日続く事もあり、当時は地域を巻き込んでの問題となった。又棟外のみならず棟内でも同様の事はあり、当施設の事務所や支援室などに勝手に入り、

コーヒーを見つけては飲む、といった行動も見られた。

(2) 睡眠弊害

「睡眠弊害」について、夜間（19時～2時）でのお茶要求が頻繁にある事が影響して睡眠に弊害が生じている。これは結果的に睡眠不足、水分過剰摂取などの問題があった。

(3) 自傷や他害行為

「自傷や他害行為」について、上記のコーヒーやお茶、又本人のこだわりでもある爪切りなどこれらの要求がすぐに叶わず思い通りにいかないストレスからか、突然走り出して戸や壁に体当たりをする、他利用者を突き飛ばす、職員の手や腕に噛み付くなどの行為がある。特に他利用者を突き飛ばす行為については、怪我の原因にもなるので強く問題視されていた。

(4) 自慰行為

「自慰行為（マスターベーション）」について、赤くて硬い物（ポストやリング、消防車や郵便局のバイク、など）に反応し、陰部を擦り付けるといった行為があった。(1)とは別の目的での無断外出で、夜間に施設を抜け出し近隣の消防署まで行って消防車に対して行為を行う、といった事例が頻繁にあった。

これらの特異行動が起こる要因としては、本人が職員に対しての要求が、「発語」、「ジェスチャー」といった限定されたコミュニケーションの手段しか持っていなかった為、本人の意図が職員に伝わりにくい事から要求通りにいかない事が多くあり、欲求が先行して起こる行動であったと推測される。又当時は職員も対応はするが、どのように対処すれば良いのか分からないケースが多くあり、頭を抱えていた。

以上を踏まえ本題となるが、これら4点の特異行動による問題に対しPECSプログラムを取り入れ、問題の改善に挑む事となる。

4. PECSとは

PECSとは<Picture Exchange Communication System>の略で、要約すると「絵カード交換式コミュニケーション・システム」の事であり、自閉症スペクトラムをはじめとするコミュニケーション障がいの人に、自発的なコミュニケーションのスキルを習得してもらうための技法である。PECSは応用行動分析（ABA）に基づく技法で、その特長として第1に機能的なコミュニケーションスキル（対象者にとって意味があり役に立つスキル）を教える事で意欲を高め、第2に指示待ちにならない自発を重視した自発的コミュニケーションの習得を目指す、第3に要求に対し対象者が具体的な結果を得られるトレーニング方法で要求機能を強化する事で意欲が高まり、第4にトレーニングは無誤学習（対象者の要求が必ず叶う）で行うため意欲が低下しない、そして第5にPECSでのトレーニングを開始する段階で多様な条件下で行い般化を行う。行動般化は自閉症スペクトラムの障がいを持つ人が苦手（ある条件下でしか行えない、習得したスキルも環境が変わると使えない、など）としているが、トレーニングから般化する事で日常生活においても獲得したスキルを使えるようになるよう配慮している。

特長として以上の5点があるが、これら段階を経て習得を目指していく。PECSにはフェイズⅠ～フェイズⅥの段階があり、本人の習得レベルに合わせてトレーニングを行っていく。大まかにフェイズⅠ「物理的な交換（絵カードとの交換）」、フェイズⅡ「距離と持続性（移動のトレーニング）」、フェイズⅢ「弁別（正しいカードの選択）」、フェイズⅣ「文構成（カードを組み合わせる文章を作る）」、フェイズⅤ「応答による要求（質問に対する応答）」、フェイズⅥ「コメント（自発的にコメントが出せる）」である。又フェイズにはステップがあり、順を追ってトレーニングを重ね習得を目指す事となる。

まとめとしてPECSとは、従来の技法にはない様々な利点を備えており、従来の技法において欠点となる点も補うことの出来る、コミュニケーションとして合理的なトレーニングの技法である。



PECSで使用するbook



PECSで使用する絵カード



利用者さんが持つBookと絵カードの使用例

5. PECSプログラムを支援に取り入れた理由

Rさんに対しなぜPECSプログラムを支援方法に選んだのかという点だが、本人の持つコミュニケーション障がいによる問題に対し、PECSの自発性を促す方法が取り組み易いという利点があったからである。PECSを取り入れる前より本人からの自発的要求はあったが、手段が分からないという状態にあったため、その点をしっかりトレーニングし強化することで本人のコミュニケーションツールとしての確立が出来るのではないかと推測された。又本人にとって「好きな物が缶コーヒーである」というハッキリとした事実があり、まずは「缶コーヒー」という「好子」を利用したフェイズに取り組んでいくことで、PECSプログラムの支援を開始する事となる。

6. RさんのPECSへの取り組み

RさんがPECSのフェイズⅠを開始したのは平成23年7月頃、元々自発の要求はあった為、手法をトレーニングする事でフェイズⅠの習得は容易であった。フェイズⅡは移動のトレーニングとなるが中々習得に至らず、職員も手探りながら支援を続け、約1年かけて修得することが出来ている。平成24年8月頃にフェイズⅢへ移行し、弁別のトレーニングを行うが、選ぶ対象が自身の好きなコーヒーであった事も有り特に問題無く、次のフェイズⅣへ移行する。フェイズⅣの文構成に対しては、「～(好きな物)」「ください」などの文を作って相手に示す事となるが、「ください」などの述語の理解が出来ず、習得に困難を極めている。平成24年9月頃から支援を続けているが、未だ習得に至っておらず、現在も実践を続け支援を継続している。ただ長期間のトレーニングにより「ください」の意味は理解せずとも、絵カードとしての組み合わせは習得されており、「お茶」「ください」や「コーヒー」「ください」など、相手に意思を伝える事は出来るようになっている。現在であるが、PECSはフェイズで習得した技術を併用する機会も多く、フェイズⅡとⅣを併用して施行している。つまり「移動」と「文構成」である。これらは繰り返し行う事で、本人自らカードを職員の許へ持って来て「～(好きな物)」「ください」と文を作成し要求が出来ており、生活の中に取り入れるまでに至っている。

フェイズⅡ (移動)



フェイズⅣ (文構成)



主語「お茶」+ 述語「ください」



主語「コーヒー」+ 述語「ください」

上記の写真は例となるが、絵カードを使って文構成し、出来た文カードを職員の許へ持って行って要求することで、職員から目的のお茶やコーヒーを貰って飲む事が出来ている。

7. PECSに取り組んで

(1) 無断外出

無断外出について、平成23年7月のPECS導入後からすぐに激減した。平成25年9月24日に商店の方へ歩く姿が見られているが、この日の無断外出は約2年ぶりに起こったことである。この事例から現在までにも一度歩いて行くことがあったが、無断外出はほぼ無くなったと言え

る。

(2) 睡眠弊害

睡眠弊害については、導入から早い段階でお茶要求が出来るようになっており、夜間のお茶要求にも対応する事である程度眠れないという状況は回避出来ている。しかし新たな問題として要求が出来る事で日中要求、夜間要求が頻繁に起こる事になる。全ての要求を受け入れていると水分の過剰摂取により体調を崩すことも考慮されたため、現在では規定の杯数を視覚的に本人に提示することでお茶要求に対し制限を設け、本人の健康状態に配慮した支援を続けている。

(3) 自傷や他害行為

導入から自発的にbookを持って要求に来ることが出来ており、想いに対し要求がある程度叶うようになった為か、自傷行為や他害行為は激減した。又職員も本人の意図が分かるため、その都度本人の要求に対応出来る事が本人へのストレス緩和になっているものと思われる。現在は苛立ちを嘔み付き、稀に壁への衝突など自傷行為で表現することはあるが、極稀であり事象が起こった際は原因もはっきりしている為、その都度本人の気持ちを受け入れている。

(4) 自慰行為

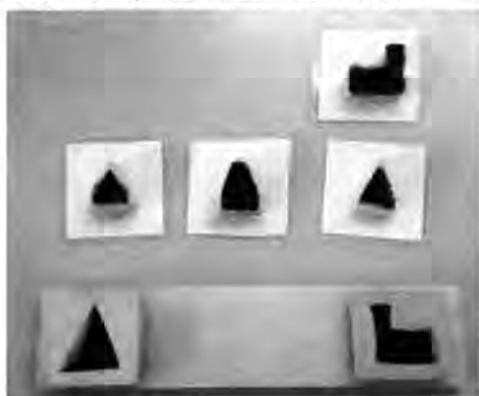
自慰行為について、現在は赤い物に反応する事があまり見ることは無くなったが、これは加齢によるものであると考えられる。ただPECSを導入する事によって、夜間での無断外出も減少していった為、こちらにも影響があったのではないかと推測される。

これらの結果から、本人の事例に対しPECSが有用であったと考えられ、現在も支援を継続している。

8. 現在のPECSでの支援

現在行っている支援は、日常生活においてフェイズⅡとⅣを併用して取り入れ施行を繰り返している。本人のこだわりでもある「お茶」と「コーヒー」は、自発的に要求に来る事が出来る為、生活において積極的に活用されている。特異行動に対する支援で、新たに出た問題として水分の過剰摂取があったが、現在は制限量を設けカードやスケジュールなどを活用し視覚的に提示する事で、本人の健康状態に配慮した支援に取り組んでいる。又日常のトレーニングの中で「まって」カードを使った待つ練習を取り入れている。これは本人が苦手とする「待つ」という行動に対してトレーニングを繰り返し習得を目指しており、いずれは生活の中で待つ事が出来るよう支援を続けていきたいと考えている。

文カード（主語＋述語の型はめカード）



スケジュール（水分摂取 目安表）



上記は現在行っている支援の一部であるが、本人は文構成の際に主語と述語の理解に至っていない事から、文カードを持って来る際に主語と述語をあべこべに持って来られる事が多く見られた。そこで写真のように、形を合わせないと入らないよう細工を施し、主語と述語が並ぶようにしている。これにより本人も正しい文構成で文カードを持って来る事が出来、又失敗していたとしても修正箇所が明確である為、支援者側も分かり易いという利点を得る事が出来た。

併せて支援を開始し現状も継続して行っているのが、問題となっていた水分過剰摂取に着目した支援である。まず本人の体格や年齢に合わせた水分摂取量をだまかに計算し明確にした事で一日の水分摂取量を固定、併せて本人が使用するコップも専用の物とし、1杯で飲める量を固定化した。その上で写真のように水分摂取可能量を絵カードや空き缶で視覚化し提示している。これにより職員間でも現状どの程度摂取しているか分かる為、過剰摂取を防ぎ健康状態への配慮が可能となった。又スケジュールボードにカードが無くなった場合、本人に飲み過ぎである事を視覚的に示す事が出来るようになった。これは目に見えて効果が表れており、一日の摂取量を守った上で夜間起きて来る事が少なくなった。推測の域は出ないが、以前のように目安無く断っていた際の「なぜ飲めないのか」というイライラを軽減する事が出来たからである、と考えている。

9. おわりに

当施設でのPECSへの取り組みは、今年で約4年程になる。今回対象とされたRさんは、PECSを取り入れた当初から実践している利用者さんのひとりであり、導入前と導入後で明らかな変化が見られた利用者さんであると思われる。事例からもPECSがコミュニケーションツールとしての効果が高いことが分かり、又本人自身もある程度必要としている利用者さんであった事も結果として出た。現在では当施設でPECSを実践している利用者さんは9名おり、事例に合わせて本人の生活に必要なかどうか試行を繰り返し、利用者さんにとって有用なコミュニケーションツールとして活用していきたいと考えている。